

学術情報の再構成による研究成果発信手法の開発

1 はじめに

奈文研では、各部局で様々な研究活動がおこなわれ、多くの研究成果が生み出され蓄積されている。これらの学術的な情報は、報告書や紀要などの学術的な出版物から、『奈文研ニュース』などの広報物、ホームページやFacebookなど、複数の媒体を通じて世間に発信されてきた。

しかし、高度な学術情報は、その専門性の高さゆえに分野ごとに細分化され、一般の人にとって「断片的に存在する、難しくてよくわからない情報」になってしまうこともある。また、専門家にとっても、自身の専門分野と異なる情報や他機関の成果・情報は、掴みにくいくともある。より多くの人が研究成果の恩恵を受容できるようにするために、研究成果などの学術的な情報をそのままのかたちではなく、コンセプトやターゲットを明確にした上で、必要な情報を適切なかたちに整えて発信することも必要である。

ここでは、その点を重視した研究成果の発信手法について、我々がおこなった取り組みを紹介する。

2 学術情報の再構成

学術情報の再構成とは、明確なコンセプトやターゲットを定めたうえで、断片的に存在している学術的な情報を適切に整理して、多くの人にとって手の届きやすいかたちに変えることである。研究成果など、一般の人にとって難しいとされる情報などを広く発信するためには特に重要なプロセスである（図38）。以下に示す媒体では、どのように学術情報を再構成したのかを解説する。

オリジナルグッズ「土器てぬぐい」 2016年度に製作した「土器てぬぐい」は、「文化財に興味を持ってもらうきっかけを提供できるグッズ」というコンセプトにもとづき、主なターゲットを「考古学や文化財に詳しくない一般の人」に設定した。

設定したコンセプトに則したグッズにするために、実用的な媒体である手ぬぐいと、考古学という分野が比較的イメージしやすい土器の実測図を組み合わせ、報告書

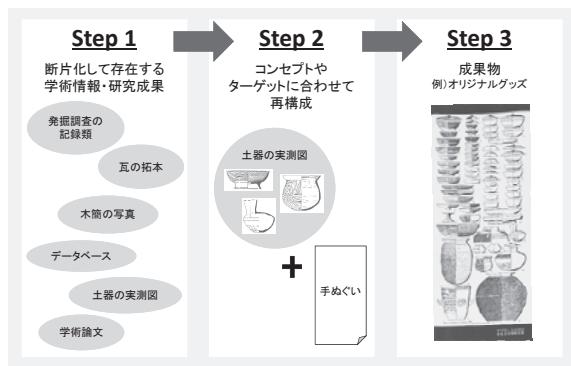


図38 学術情報を再構成するプロセス

の体裁を取り入れたデザインに仕上げた。結果として、その組み合わせの斬新さがターゲット以外（文化財や考古学に興味のある人）にも広く受け入れられ、学術的な資料の新たな活用方法や潜在的な資産としての価値を見出すことができた。

オリジナルグッズ「国宝木簡手ぬぐい」 「国宝木簡手ぬぐい」は、木簡としては初めて平城宮跡出土木簡が国宝指定を受けたことを広く発信するために、史料研究室と協力して2017年度に製作した。脆弱な木簡が国宝に指定されるまでには、多くの人が携わってきた地道な作業もあることを知ってほしいという狙いから、コンセプトは、「出土した木簡が保存されるまでの過程が、わかりやすく伝わるグッズ」に設定した。主なターゲットは「考古学や文化財に詳しくない一般の人」と「文化財（特に木簡）に興味がある人」に設定した。

設定したコンセプトとターゲットにしたがい、国宝木簡が収蔵されている引き出しのようすと手ぬぐいを組み合わせ、手ぬぐいのデザインにした。引き出し1段と手ぬぐいの形状が似ていたことから、引き出しの奥（手ぬぐいの上側）の部分を断ち切ることで、引き出している途中の臨場感を演出した。木簡に関する知識がない人にも、木簡がどのようなものかを視覚的に理解できるように、筆跡や木の質感が忠実に伝えられる写真を手ぬぐいに採用した。

また、「国宝木簡手ぬぐい」には、手ぬぐいに掲載した木簡の釈文を紹介する「ミニブック」を同封した（図39）。このミニブックの表面では木簡の発掘から保存までの過程を10枚の写真で紹介しており、最初の写真を木簡の出土状況とし、木簡の最終的な保管場所となる引き出しを手ぬぐいのデザインにすることで、ミニブックとのリンク感を高めつつ、コンセプトに則したかたちになるように試みた。裏面には釈文を掲載し、木簡に書かれた文字情報にも注目してもらえるようにした。また、木簡情報検索システム「木簡庫」や「全国遺跡報告総覧」などのQRコードを掲載し、木簡についての学術的な情報源へ簡単にアクセスできるようにした。このようにグッ



図39 「国宝木簡手ぬぐい」に同封したミニブック

ズに学術的な情報へのアクセスを設けることで文化財の本質的な価値を伝え、知識を深める機能も与えられる。

埋蔵文化財ニュース 2018年3月発行の『埋蔵文化財ニュース170号』(以下、『埋文ニュース』)では、環境考古学研究室の文化財担当者研修について取り上げ、環境考古学研究室と協力して編集をおこなった(図40)。全国の自治体に広く配布するという性格上、主なターゲットは研修の受講対象である「地方自治体の文化財担当者」とした。新たな研修参加者を獲得するためには、まずは多くの人に『埋文ニュース』を手に取ってもらうことが重要であると考え、「手に取りたくなる研修紹介」をコンセプトとした。

このコンセプトにあわせて、『埋文ニュース』を手に取った人が容易に研修を連想できるように、表紙には「研修生の机の上」をイメージした写真を使用した。この写真を、表紙と裏表紙がひとつなぎになるように配置することで、今までの表紙イメージを刷新し、『埋文ニュース』への注目度が高まるように試みた。内容のデザインについては、オーソドックスな学術書や広報誌との差別化を図るため、雑誌のような雰囲気を意識した。また、内容のレベルが落ちたり、デザイン先行にならないように注意しながら、「わかりやすさ」や「親しみやすさ」を重視したコンテンツの構成をおこなった。

3 研究活動の資産化

奈文研でおこなわれている日々の活動は、研究の成果を生み出すための重要なプロセスである。しかし、文化財そのものに比べると、これらの活動自体は今まで積極的に記録されてこなかった。そこで、研究活動を資産化する取り組みとして、2017年度には日々の調査・研究のようすを写真に記録した。

撮影した写真は、報告書や学術的な資料にも使えるような写真から、展示や広報物用の雰囲気のある写真などで、幅広い用途に対応できるよう撮影対象や構図も考慮しながら写真の蓄積を試みた。

学術的な情報を一般の人々にわかりやすく伝えるためには、写真資料は必要不可欠である。作業風景等の撮影に



図40 『埋蔵文化財ニュース170号』の表紙

よって蓄積されたデータは、新たな資産となり、今後の学術情報の再構成にも基礎的な情報となるはずである。今後も「国宝木簡手ぬぐい」のミニブックのように、多くの情報成果の発信に活用していくと考える。

4 効果・反響

2017年2月に発売した土器てぬぐい、ブックカバー、瓦てぬぐいは、販売開始後2ヵ月ほどで完売、再販売をするなど予想以上の反響があった。FacebookやtwitterなどのSNSでも、オリジナルグッズに関する投稿が数多く見受けられた。一般の人の投稿の中には、2017年11月発売の水落遺跡遺構図をプリントしたトートバッグを持って、実際に水落遺跡に足を運んだ人もいる。グッズから文化財に興味を持ち、現地に足を運んだり実物を見るきっかけにもなったりしていることが確かめられた。また、新聞社などにも積極的に情報を発信することで、何度も記事に取り上げてもらえた。

所内では、研究員がオリジナルグッズに関してアイディアを出したり、新しい連携が生まれたりと、学術資料への新たな価値や情報発信にも目が向けられるようになった。

5 課題

学術的な情報を再構成し、オリジナルグッズやその他の媒体として広く発信する際には、学術的な情報の質を落とさないように注意が必要である。そのためには、関係する研究室との連携は必須であり、それによってより良い成果が生まれる。

しかし、研究成果などの学術情報を再構成し、かたちとなつても、それを多くの人に知つてもらわないと効果が少なくなってしまう。様々な学術情報を複合的に活用していくためには、片手間での作業では大きな成果は期待できない。今後は、マーケティングやデザインなどに関する専門的な人材を確保し、総合的な情報戦略を立てて情報を発信していく必要があるだろう。

(飯田ゆりあ・小沼美結)